

研究・調査報告書

報告書番号	担当
9 4	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Alcohol consumption, physical activity, and chronic disease risk factors: a population-based cross-sectional survey. アルコール消費、身体活動量および慢性疾患の危険因子：地域集団を対象とした断面研究</p>	
執筆者	
Mukamal KJ, Ding EL, Djousse L.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
BMC Public Health. 2006;3;118.	
キーワード	
アルコール、身体活動量、危険因子、断面研究	
要 旨	
<p>背景： アルコール消費と循環器疾患との関連は交絡によるものであるか、またその度合いは他の行動に当てはまるか明らかでない。</p> <p>方法： アメリカ合衆国における地域集団における成人対象の電話調査である 2003 年 Behavioral Risk Factor Surveillance System を使用して、123,359 人の禁酒者および 126,674 人の適量飲酒者(男性:1 日 2 杯以下、女性:1 日 1 杯以下)における慢性疾患の危険因子を、性・年齢調整および多変量調整モデルにより比較した。加えて座業をする人と活動的な人(週 5 日以上、1 日 30 分以上の適度な身体活動もしくは週 3 日以上、1 日 20 分以上の活発な運動)との比較も行なった。</p> <p>結果： 年齢・性別を調整した解析において、慢性疾患のリスク因子と不健康な生活習慣は、一般的に飲酒者に比べ禁酒者のほうが頻度が高かった。しかしながらこれらの違いは、人種および教育を加えた調整によって多くは、緩和されたり消失したりした。果物や野菜摂取が少ないこと、離婚、かかりつけ医がないことについては人種と教育の調整によって、当初、性・年齢調整した結果ではみられた禁酒との正の関連は反転した。座業および活動的な人の比較においても、身体的に活動的な人はリスク因子の水準が一般的に低いという同様の結果を示した。</p> <p>結論： 禁酒者と飲酒者との相違は、いくつかの社会人口学的な特性を調整したもとでは緩和され、座業と活動的な人の比較でも同様な傾向を示した。両項目を扱う観察研究においては未調整の交絡の存在が疑われるものの、われわれの結果は適度な飲酒がこの点において特別であるという根拠を与えない。究極的にこれらの質問に確実に答えるためには、生活習慣に対するランダム化試験が必要であろう。</p>	